

東の庭と西の庭

隠されたオアシスに例えられている東の庭は、博物館の敷地の南東の角の緩やかな盛り上がりの上に控えめに位置しています。庭園には、朝鮮時代（1392～1910年）に朝鮮半島の墓地を飾った動物像だけでなく、軍と民間の役人の石像があります。これらの人物は、かつて大阪の個人宅の庭に飾られ、1975年に山本あや氏によって美術館に寄贈されました。庭園には、小さな石の仏塔（仏塔）と、方広寺の石壁の1つの背後から発掘された仏教の神々も含まれています。方広寺の旧境内は博物館の敷地と重なっており、かつては寺社の南門が平成知新館のエリアにありました。

広大な西の庭の最も顕著な特徴は、木々や花々がたくさんある中にある歴史的な石碑の山です。特に印象的なのは、それぞれ13層の2つの花崗岩の仏塔で、近くの場所から移動され、博物館の敷地の北西の角にあります。伝説によると、彼らは有名な戦士の源義経（1159–1189）の2人の家臣の墓であるともいわれました。残念なことに、仏塔の1つに刻まれた日付は1295年に相当するため、この物語はフィクションのようです。

西の庭にはまた、仏教の神々の石像がいくつかあります。その中には、12世紀の大日、宇宙の仏像があります。また、同じく12世紀の無限光の仏、阿弥陀三尊蔵。そして、15世紀にさかのぼる、知恵の王の間で最も重要な不動明王の像です。また、庭には、日本のキリスト教徒の迫害の始まりである慶長時代（1596～1615）の日付に十字架が刻まれたいくつかの丸いキリスト教墓石があります。

おそらく、西の庭で最も目立つオブジェクトは、大きな石桁が上にある3つの石の橋脚です。これらは、1588–1589年に豊臣秀吉（1537–1598）によって再建された五条大橋から来ています。橋は、秀吉が同時期に建設した巨大な大仏殿のある方広寺への容易なアクセスを提供しました。